

## 五山文学詩文にみえる播磨関連の地名・寺社名・人名

大村 拓生

ひょうご歴史研究室赤松氏と山城研究班では、平成二九年度から歴史研究推進員大村により、禅宗文献にみえる播磨関連の地名・寺社名・人名の収集が続けている。

赤松氏研究では高坂好氏<sup>①</sup>を嚆矢として禅宗史料が活用されており、自治体史史料編でも『龍野市史』・『姫路市史』など意識的に採録されているものもある。ただしその関心はもっぱら赤松氏をはじめとする武将の来歴を明らかにする素材としての評価で、地域史としての視点は後景に退いている。そのなかで大村が担当した『播磨新宮町史』は町域に立地した慈恩寺で幼少期を過ごした天隠龍沢について、武将を讃えたものではなく地域との関わりをめぐる詩文を意図的に収録したが、限

られた範囲に留まるものだった。

そこで研究班では、対象を播磨一国全体に広げ、禅宗文献のうち播磨の地名・寺社名および赤松氏など人名の登場するものを抽出し、文献全文をデータベース化することになったのである。

ここで紹介するのは、上村観光編『五山文学全集』全五巻（思文閣出版で復刻、「全1」と略、三巻までは通し頁）・玉村竹二編『五山文学新集』全六巻と別巻二巻（東京大学出版会、「新1」・「新別1」と略）・『続群書類従』一二上下と一三上下（「続12上」と略）所収の漢詩文について、巻名と開始頁数、詩文集名、詩文題もしくは序文（カッコは割注、長文の場合は後略して\*と表記）、登場する地名・寺社名（播磨以外は国名を記した）、俗人および作者以外に登場する禅僧名を抽出した

ものである。名称は本文表記そのままではなく、一般的表記とし、人名も実名を基本としているが、官途のままにしたものもある。翻字は原則として新字を用いた。

なお全1所収の「岷峨集」・「雪村大和尚行道記」は新3と、続12下所収「梅花無尽蔵」は新6と、続13上所収「天隠語録」は新5と、それぞれ重なるため省略した。また「雪村大和尚行道記」は詩文集ではなく、雪村友梅の行状に法孫大有有諸が注釈をつけたものだが、播磨関係の情報量が豊富なため、行状本文を詩文題に準拠して採録した。また漢詩文の詳細については、それぞれの解題を参照されたい。

個別の詳細な分析は別の機会に譲りたいが、全体を通覧してみると法雲寺（金華）がもつとも頻出し、十方住持の諸山として五山僧の昇進ルートに位置づけられていたことの反映といえる。また十刹とはいえ雪村派が住持を歴任し、赤松氏が外護した宝林寺（赤松）も多く、同じく雪村派の本住寺・慈恩寺・城禅寺（56）・栖雲寺（116ほか）・大義寺（247ほか）・龍源寺（256）・連城寺（273）な

どの名前をみえる<sup>(2)</sup>。その他に諸山に列せられている円応寺・瑞光寺（224）をはじめ多数の禅院の名前を確認することができる。また清水寺（18）・広峯（50）・鶴林寺（85）・書写山（266など）などの寺社の名前も見え、室・明石などの名所を取り上げたものも散見される。武将の来歴はもちろんのこと多様な分析が可能な史料群といえよう。

もとより活字化されている漢詩文・語録などはこれ以外にもあり、『大日本史料』に個別に採録されているものも少なくない。また未刊のものも相当数にのぼることが想定される。その点で今回の取り組みは最初の第一歩にしか過ぎないが、広く活用されることを望むとともに、今後も公開に向けての取り組みを続けていきたい。

(1) 高坂好『赤松円心・満祐』吉川弘文館、一九七〇年・『中世播磨と赤松氏』臨川書店、一九九一年。

(2) これらの寺院については、拙稿「揖保川流域の禅院と石見守護代所」（『ひょうご歴史研究室紀要』二二、二〇一七年）参照。